

どうぶつたちとたびニンゲン

小二・雑賀 れい

むかしむかし、いろんなどうぶつたちがなかよくらす森があった。ある日、リスが大あわてでとんできて、さけんだ。「たいへんだあ、あらしがくるんだ。みんな、はやくにげて！」どうぶつたちが、うちの中からそのようすをじっと見ていると、ゴロゴロかみなりがなりひびき、雨がザーとふり、風がビュービューふきあれた。あらしがやむと、森のほとんどもがあらされてしまっていた。

そこにとおりかかった、たびニンゲンがいた。がっかりしたどうぶつたちを見て「どうしたのですか？」と聞いた。「ぼくたちの森があれでなくなって、かなしんでいるんだ」

たびニンゲンが「それじゃあ、みんなでたてなおそう。あたらしい森をつくるんだ」というと、どうぶつたちは「さんせい！」と元気になり、つくりなおすことになった。

でも、どういう森にするかを話し合うと、いけんがばらばら。「花がさく木がいっぱいのおつくしい森がいいわ」とトリたちがいえば、「おいしいはっぱがいつもたべられる草やひくい木がたくさんほしい」とシカやウサギ。「ドングリやクリをおなかいっぱいいたべられる木のみ森にしよう」と、クマがいう。どんどん話しづらくなってしまった。すると、たびニンゲンは「それならみんなのアイデアをぜんぶつかえばいい」みんなは大さんせいして、あたらしい森づくりにとりかかった。

たおれた木をかたづけたり、土をたがやしたり。いろんな木のみをあつめたら、トリたちは空からタネやみをまいた。

森づくりのようすをイノシシ国のけらいがそつと見ていた。イノシシ国の森のおしろも、あらしですつかりあれてしまったから。「こいつはいい。王さまにほうこくしよう」

ある朝、たびニンゲンが目をさますと「ここはどこだ？」するとうしろから、イノシシ国の王さまが「ここはオレさまのしろだ。おまえはけらいになって、ここにせかい一の森をつくるのだ」それを聞いたたびニンゲンは、「わたしの力でも、そんな森はつくれません。みんなが力を合わせてがんばったから、森づくりができたのですよ」王さまは「なかまになるなら、ほうびをやろう」といったけれど、たびニンゲンはけらいにならなかった。

たびニンゲンはにげ出し、どうぶつたちの森へかえたので、王さまはかんかんにおこり、けらいをあつめて、どうぶつたちの森にたたかいにいった。

どうぶつたちは大きわざして、たびニンゲンにおねがいをした。「このまほうのけんとたてで、いっしょにたたかってください」たびニンゲンは「いいですよ」と、うなずいた。

イノシシの大ぐんは、するどいきばでドドドつとむかってきた。まほうのけんをひとふりすると、せめてくるイノシシをひよいかわし、するどいきばも、たてのほうがつよかった。小さな虫まで森のみんながたたかかった。たびニンゲンはとうとう王さまの前に来た。そこで、たびニンゲンは考えた。イノシシたちも、自分たちの森の国をなおしたいんだ。だから、ひっしなんだ。

王さまがつかれてきたとき、たびニンゲンがていあんした。「せかい一の森をみんなで作くりませんか？ みんなが力を合わせればつ

---

くれます」どうぶつたちもうなずいた。

「イノシシさんは土をほるのがとくいでしょう。たがやすのをてつだってください」とたびニンゲンがいうと、王さまは「せかい一の森は、みんながしあわせにくらせる森のことかもしれないね。いっしょにつくろう」

どうぶつたちは大よろこびして、「ありがとう」と、おれいをいいあった。

みんなの森で、イノシシたちも、どうぶつたちとなかよくくらすようになった。森のおしろはみんなのこうえんになり、イノシシの王さまは、かんり人になった。

たびニンゲンも、いごこちがいいのでいっしょにくらしたいとおもってたびするのをやめた。ただの「ニンゲン」になったんだって。

---